

Title	包括的製販同盟に関する一考察-メーカーと流通の新たな関係を求めて-
Sub Title	
Author	石井亮太(Ishii, Riyouta) 和田充夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1995
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1995年度経営学 第1145号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001995-1145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名

石井 亮太

主査 和田 充夫

副査 奥村 昭博

嶋口 充輝

所属

和田 充夫 研究室

包括的製販同盟に関する一考察

—メーカーと流通の新たな関係を求めて—

メーカーの流通チャンネル支配、次に流通からのメーカー支配と、時の移り変わりとともに、日本の流通システムも変貌を遂げてきた。そして、今や、メーカーと流通、どちらが力を握るでもなく、消費者受益の向上を目指して両者が互いに手を結び、商品を供給する動きが現れている。本論文では、そのような「製販同盟」と呼ばれる動きに焦点を当て、中でも商品の共同開発をも含む「包括的」な製販同盟を事例として取り上げることで、その本質を明らかにする。

本論文で具体的な対象事例として取り上げるのは、近年、激しい戦いになっている「焼きたてパン」事業である。そこには、CVS間の差別化競争や、製パン業界の寡占化という問題も絡み、事態は複雑である。逆に言えば、製販同盟の影響が様々な局面に顕著に現れている。その一つ一つを分析することによって、製販同盟の本質にアプローチする。

結論から言えば、日本で呼ばれるところの製販同盟は、製販同盟とは言えない。メーカーと流通の役割分担が曖昧になっているだけであり、その統合が成されていない。原因は、双方の相手に対する「無関心」であり、流通はより積極的にメーカーの製造に関して介入していく必要がある。その一方で、メーカーは流通に対し熱心に消費者情報を求めて行くべきである。もはや、消費者が利益を得られないシステムや企業は自然と淘汰されていく運命にある。主人公はメーカーでも、流通でもなく、消費者なのだ。